

## 地域資源を万遍なく利用して、地域に適合して地域に優しい、地域と歩む大型酪農経営の展開



有限会社 リゲルファーム  
北海道紋別郡遠軽町

### 推薦理由

有限会社リゲルファームは、平成16年に2戸の酪農家によって設立された、酪農・肉用牛および畑作を営む農業法人である。

[その取り組みについて]

共同法人化は、後継者不足のなかで労働力を確保し酪農を将来にわたって継続していくための方策の一つであり、また雇用労働により地域の雇用確保にもなっている。

マメ科牧草の新品種であるガレガの作付けやヒマワリの飼料化は、自給飼料面積が狭小なこの地域で飼料自給率の向上を図るための取り組みであり、またヒマワリの作付けは景観作物として地域の観光資源にも寄与している。

カラマツの間伐材を活用した牛舎施設は、単に低コスト、快適性だけではなく、地域の重要な産業であり資産である林業を守るとともに、森林の保護、環境保全にもつながっている。

また、畑作（秋まき小麦）との複合という経営形態が、収入の補完、堆肥還元用地の確保、小麦の副産物である麦稈を敷料として活用できる。そして、近隣の畑作農家とも連携を図り、麦稈等と堆肥を交換することにより、敷料の安定確保、地域の畑作地の地力維持と環境に負荷をかけない酪農経営につながっている。

また、乳牛資源を活用して受精卵移植等により和牛生産を行い、また町和牛振興会会長として地域の和牛振興の先頭にたっている。

これらの取り組みは、地域の課題に対処し、地域とともに歩む酪農経営を確立して、地

域の重要な産業である酪農経営を将来にわたって継続させていくための取り組みである。

この農場の名称にもなったリゲル（オリオン座の一等星）のごとく、満天の空高く燦然と輝く、地域の酪農の道標となる事例であることから、本年度の経営部門に推薦するものである。

（北海道優良事例選定等委員会委員長 岡本 全弘）

## 発表事例の内容

### 1 地域の概況

遠軽町は、北海道の東北部、オホーツク総合振興局管内のほぼ中央、内陸部に位置し、平成17年に旧遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村の4町村が合併して誕生した、東西47km、南北46kmにわたる面積1,332k㎡、人口2万2,000人余りの緑豊かなまちである。

遠軽町を貫流する湧別川の上流に位置し、多くの支流が合流し、そこに広がる肥沃な大地は、開拓当初から農耕地に適した環境として繁栄してきた。



遠軽町は、亜寒帯低温乾燥地帯に属しているが、沿岸から20kmしか離れていないためオホーツク海型気候地域の特色ももっている。梅雨や台風の影響を受けることが少なく、北海道の東北部にありながら年間を通して温和で暮らしやすいまちである。5月～9月は、オホーツク海高気圧の影響を受けて低温となることもあるが、比較的温和で秋から冬にかけては雨量も少なく晴天乾燥の日が続く。冬は北西の季節風と流氷の影響を受け、氷点下20℃を下回ることも珍しくないが、山地を除くと積雪は比較的少ない。

遠軽町の農業は、畑作面積が1,263haであり、そのうち秋まき小麦611ha、てんさい191haのほか馬鈴薯、スイートコーン、かぼちゃ、アスパラガス、しそ等、多彩な作物が生産されている。飼料作物は、牧草地3,131ha、飼料用とうもろこし1,193haとなっている。

農家戸数は206戸で、うち乳用牛は77戸、肉用牛は18戸が飼養している。

同町の牛飼養頭数をみると、乳用牛9,359頭うち経産牛頭数は5,572頭、黒毛和種が838頭、ホルスタイン種・交雑種等の肉用牛が1,002頭となっている。

酪農では町全体の出荷乳量は4万7,468t、1戸当たりの経産牛頭数は70.5頭、出荷乳量600t、経産牛1頭当たり乳量8,519kgとなっている（平成21年12月現在の数値）。

## 2 経営・生産の内容

### 1) 労働力の構成 (平成 22 年 6 月現在)

区分	経営主との 続柄	年齢	農業従事日数 (日)		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
構成員	代表取締役	63	365	365	飼養管理、外部対応	役員
	取締役 (代表の長男)	35	365	365	全般	役員
	取締役	57	365	365	飼養管理、外部対応	役員
従業員	正職員A		300	300	飼養管理全般	
	正職員B		300	300	飼養管理全般	
	正職員C		300	300	搾乳	
	正職員D		300	300	搾乳	
	正職員E		300	300	飼養管理全般	
臨時雇	延べ人日		4人×300日		搾乳・雑用	

### 2) 収入等の状況 (平成 21 年 1 月～12 月)

(単位：円)

項目		金額	備考
酪農 収入	生乳販売	165,570,957	補助金含む
	初生牛販売	14,712,788	和牛 11,390,903 含む
	育成牛販売		
	奨励・補填金等	28,745,573	
	乾草・堆肥		
	共済金		
	その他		
計		209,029,318	
農外収入		12,213,754	

### 3) 土地所有と利用状況

区分		実面積(ha)		飼料生産利用延べ面積(ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田				
	転作田				
	飼料畑	61.0	58.7	61.0	58.7
	未利用地				
	計	61.0	58.7	61.0	58.7
草地	個別利用地	121.0	119.7	242.0	239.4
	共同利用地				
	計	121.0	119.7	242.0	239.4
	野草地				
	山林原野				

※構成員所有分も借地として取り扱い

#### 4) 自給飼料の生産と利用状況 (平成 21 年)

使用 区分	飼料の 作付体系	面積 (a)		所有 区分	総収量 (t)	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	延べ面積			
採 草	チモシー主体	2,220 a	4,440 a	自己 1.3ha 借地 119.7ha	4,521 t	1 番 : 乾草 2 番 : サイレージ
	チモシー・ガレガ混播	6,660 a	13,320 a			サイレージ
	チモシー・ルーサン混播	2,220 a	4,440 a			サイレージ
飼料畑	とうもろこし	6,100 a	6,100 a	自己 2.3ha 借地 58.7ha	3,879 t	サイレージ
放 牧	(育成用)	1,000 a	1,000 a			

## 5) 経営の実績・技術等の概要

### (1) 経営実績（平成 21 年 1 月～12 月）

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族・構成員	4.4 人
			雇用・従業員	3.0 人
	経産牛平均飼養頭数			225.2 頭
	飼料生産用地延べ面積			29,300 a
	年間総産乳量			2,035,810 kg
	年間総販売乳量			2,035,810 kg
	年間子牛販売頭数			ホル 113・和牛 25 頭
	年間育成牛等販売頭数			和牛初妊 8 頭
収益性	酪農部門年間総所得			11,199,221 円
	経産牛 1 頭当たり年間所得			49,730 円
	所得率			6.2 %
	経産牛 1 頭当たり	部門収入		800,549 円
		うち牛乳販売収入		735,217 円
		売上原価		822,227 円
		うち購入飼料費		319,290 円
うち労働費		106,839 円		
うち減価償却費		146,276 円		
生産性	牛乳生産	経産牛 1 頭当たり年間産乳量		9,040 kg
		平均分娩間隔		13.8 カ月
		受胎に要した種付回数		2.1 回
		牛乳 1 kg 当たり平均価格		81.3 円
		乳脂率		4.13 %
		無脂乳固形分率		8.72 %
		体細胞数		19 万個/ml
		細菌数		0.1 万個/ml
	粗飼料	経産牛 1 頭当たり飼料生産延べ面積		130 a
		借入地依存率		98.0 %
	乳飼比（育成・その他含む）			43.4 %
	生乳 100kg 当たり差引生産原価			8,383 円
	経産牛 1 頭当たり投下労働時間			66 時間
安全性	経産牛 1 頭当たり借入金残高（期末時）			1,059,327 円
	経産牛 1 頭当たり年間借入金償還負担額			177,063 円

(2) 技術等の概要

地帯区分	中山間	
飼養品種	ホルスタイン	
後継者の確保状況	有	
飼養・搾乳	飼養方式	フリーストール
	搾乳方式	パラレル 12頭ダブル
	牛群検定事業	有
飼料	自家配合の実施	無
	TMRの実施	有
	通年サイレージ給与の実施	有
	食品副産物の利用	無
繁殖・育成	ETの活用生産の実施	有 黒毛和種
	F <sub>1</sub> 生産の実施	有 ETで受胎しない場合のみ
	カーフハッチの飼養	有 自家作製
	採食を伴う放牧の実施	有 乳牛育成牛・和牛
	経産牛の自家産割合	100%
販売	加工・販売部門の有無	無
	地産地消の取り組み	無
その他	肥育部門の実施	無
	協業・共同作業の実施	有 2戸協業法人
	施設・機器具等の共同利用	有 牧草播種4戸、牧草収穫2戸共同
	共同堆肥センターの利用	無
	ヘルパーの活用	有 8-9日/年
	コントラクターの活用	有
	公共育成牧場の利用	
生産部門以外の取り組み		

6) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	牛舎(フリーストール・カラマツ材)、ミルクパーラー(パラレル12頭ダブル)、哺育舎(カラマツ材)、育成牛舎(旧搾乳牛舎改造)、堆肥舎(鉄骨1基、カラマツ材1基)、飼料調製庫、バンガーサイロ6基 他
機械・器具	哺乳ロボット2基、バルククーラー、トラクター9台、自給飼料調製機械(プラウ、ハロー、ケンブリッジローラー、モアコン、ヘイテッター、ロールベラー、ラッピングマシン、ベールグラブ、ハーベスター、テッピングワゴン、マニアスプレッター等)、ミキサー、牛床マット、ふん尿処理機械・器具(バーンスクレーパー、バーンクリーナー)、他

## 7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

### (1) 処理の内容

処理方式	混合処理
処理方法	フリーストール牛舎→フロントローダー→堆肥舎(鉄骨)→《2週間程度》 →畑地近くの堆肥舎(カラマツ材) →《麦稈、給与できない乾草、シソ殻を混合、切り返して堆肥化:半年》 →自家圃場散布・近隣の畑作農家へ
敷料	自家農場での麦稈と他の麦作農家との交換による麦稈およびオガクズを敷料として利用。また敷料にはシソ栽培農家と交換した青シソの搾り粕を水分調整に使っており、青シソの香りで牛舎内の臭いを防いでいる。

### (2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等
販売		
交換	50%	麦作農家 シソ栽培農家
無償譲渡		
自家利用	50%	

### 3 経営の歩み

#### 1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭（羽）数		飼料作付面積		経営・活動の内容	
		(鹿野)	(久須田)	(鹿野)	(久須田)	(鹿野)	(久須田)
昭和25年	酪農						
昭和25年	酪農	経産牛2				一憲氏の先代が酪農経営開始	
〃 33年	酪農					現在地に移転	
〃 55年	酪農 畑作						小麦生産開始
〃 62年	酪農・ 肉用牛					S59～60年の生乳生産調整による影響から和牛繁殖牛を導入（妊娠牛3頭）	
平成2年	酪農・ 肉用牛					和牛受精卵移植を開始	広島県より和牛繁殖雌牛を導入し、素牛生産開始
〃 5年							
〃 6年						生田原町に黒毛和種牛肥育施設完成	
〃 7年						鹿野憲嗣氏が就農	
〃 10年	酪農・ 肉用牛 畑作					小麦部門導入	
〃 11年							久須田栄治氏が生田原町農協組合長に就任（5月） ※上湧別町農協と遠軽町農協が合併、えんゆう農協が発足
〃 14年		乳経産 60 乳育成 35 和繁殖 40 和育成 50	乳経産 35 乳育成 25			ガレガの作付け開始	
〃 15年						鹿野牧場が頭数増や施設不足等で労力的に厳しくなってきたことと、久須田氏がJA組合長に就任し久須田牧場も労力的に厳しくなっていたことから共同経営を検討（9月） 育成牛部門の一部共同飼養開始（10月） 法人の定款を作成 ミキサーフィーダー導入 TMRによる餌の共同化開始	

年次	作目構成	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
平成16年	酪農 肉用牛 畑作	乳牛経産 106・育成 70 和牛繁殖 42・素牛 27	採草 86ha 放牧 13ha デントコーン 25ha	<b>有限会社リゲルファーム設立</b> バンカーサイロ 6 基建設 カラマツ材を使用したフリーストール畜舎建築 ミルクキングパーラー・バルククーラー設置、鹿野憲嗣氏、北海道農業士取得
〃 17年		乳牛経産 181・育成 53 和牛繁殖 37・素牛 37	採草 91ha 放牧 13ha デントコーン 25ha	旧遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村の 4 町村が合併して遠軽町が誕生
〃 18年		乳牛経産 186・育成 110 和牛繁殖 22・素牛 27	採草 85ha 放牧 10ha デントコーン 31ha	J A えんゆう、J A まるせっぷ、J A 生田原町が合併し、新生「J A えんゆう」が発足 カラマツ材堆肥舎建設
〃 19年		乳牛経産 197・育成 127 和牛繁殖 28・素牛 18	採草 85ha 放牧 10ha デントコーン 36ha	平成 19 年度間伐材用途開拓事業（全国森林組合連合会）によりカラマツドーム型畜舎（哺育舎）を建築（竣工 20 年） 携帯電話を使った牛の分娩監視システムの導入
〃 20年		乳牛経産 234・育成 131 和牛繁殖 15・素牛 41	採草 85ha 放牧 10ha デントコーン 48ha	緑肥用ヒマワリ飼料化に向けた取り組み開始 北海道農業研究センター主催の研究会でガレガ栽培等について発表（11/21）
〃 21年		乳牛経産 223・育成 145 和牛繁殖 15・素牛 35	採草 111ha 放牧 10ha デントコーン 61ha その他 自経営の小麦畑等 11ha から、他経営の小麦畑等 4ha からヒマワリを収穫	緑肥用ヒマワリ飼料化の取り組みが、新聞・雑誌等に取り扱われる
〃 22年		乳牛経産 242・育成 136 和牛繁殖 19・素牛 20 ※H22. 2		

## 2) 過去5年間の生産活動の推移

項目	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年
畜産部門労働力実員数(人)	3+従3	3+従3+臨2	3+従4+臨4	3+従4+臨4	3+従4+臨4
飼養頭数(頭)〔各年6月〕	【乳牛】 経産牛 181 育成牛 53 【黒毛和種】 繁殖牛 37 素牛 37	【乳牛】 経産牛 186 育成牛 110 【黒毛和種】 繁殖牛 22 素牛 27	【乳牛】 経産牛 197 育成牛 127 【黒毛和種】 繁殖牛 28 素牛 18	【乳牛】 経産牛 234 育成牛 131 【黒毛和種】 繁殖牛 15 素牛 41	【乳牛】 経産牛 223 育成牛 145 【黒毛和種】 繁殖牛 15 素牛 35
販売・出荷量等(kg)	【生乳】 1,159,597	【生乳】 1,553,706	【生乳】 1,659,577	【生乳】 1,831,143	【生乳】 2,035,810
畜産部門の総売上高(円) 〔クミカン取引分〕	139,295,000	145,310,766	139,295,290	158,644,813	190,354,129
主産物の売上高(円) 〔生乳(補給金含む)〕	111,778,000	119,222,873	111,778,359	135,875,307	164,245,586

従：従業員、臨：臨時雇

## 4 特色ある経営・生産活動の内容

### 1) 地場のカラマツ材を使った、環境にやさしく使い易い畜舎等の整備

リゲルファームでは、カラマツの間伐材を利用した畜舎や堆肥舎を建設している。カラマツ牛舎は、①畜舎の中の温度や湿度の調整機能があり、牛へのストレスが少ない、②強度が強く、サビや腐食の発生の心配がないのでメンテナンス費用も比較的かからない、③鉄骨造やブロック造に比べ固定資産税の課税税率が低い、等の利点がある。

また、地場の大切な資源である森林は、地球温暖化の原因の一つと言われている二酸化炭素を吸収するとともに、森林の木材・間伐材を利用することにより森林の荒廃を防ぎ、林業の振興、地域の活性化へとつながる。森林資源を農業と林業で循環利用していく、地球にやさしい取り組みとなっている。リゲルファームでは、森林組合や林産流通加工と連携して、木材・間伐材を活用した牛舎施設の積極的な普及啓蒙・利用を進めている。

### 2) 飼料自給率向上を図るため、ガレガの作付け、緑肥ヒマワリの飼料への利用

リゲルファームでは、飼料自給率の向上を図るため、収量が高く高栄養価の飼料作物の作付けに取り組んでいる。

牧草地の生産性と栄養価を向上させるためには、乾物収量が多く栄養価の高いマメ科牧草を取り入れることが有効であるが、その中でガレガは、イネ科牧草との混播適性があるだけでなく永続性にも優れている特徴があることから、平成14年に鹿野氏が導入し、法人化した後も作付けしている。ガレガは、収量も高く、栄養成分も良好で嗜好性も高いなどから作付面積も増えてきており、現在チモシーとの混播で30haを作付けしている。

なお、このガレガは、栄養面・嗜好性に優れたマメ科牧草として、関係機関等が推進してきた経緯があるが、実際にはなかなか定着せず頭を悩ませている生産者が多い。そうし

た中、リゲルファームは、良好な実績を残しているため、各地から見学者があり、昨年には(独)農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター主催のセミナーにおいて報告を行うまで成果を上げている。

一方、ヒマワリは、「秋まき小麦の収穫後に畑地が遊んでいるのはもったいない。牛の飼料になるものでその年に収穫(次年には他の作物を作付ける)できるものはないか」と検討し、平成20年から緑肥および景観作物として作られていたヒマワリを作付けした。ヒマワリの飼料化については農業改良普及センターやホクレン等の協力を得て行ったが、十分に飼料として利用できることが実証され、作付けを増やしていく予定である。

なお、ヒマワリを飼料化するのは上物のみである。本来は上物も畑にすきこむ事例がほとんどだが、根があればVA菌根菌の働きによりリン酸吸収量が増大し、地力向上という目的は果される。

多頭数飼養になりつつあるリゲルファームでは、飼料面積が限られてくるなかで、良質な粗飼料を必要な量だけ確保するためのいくつかの取り組みがなされ、結果としてTDN自給率50%超という、この頭数規模としては高い数値を実現している。

### 3) 小麦→緑肥用ヒマワリ→飼料用とうもろこしの輪作体系

リゲルファームでは、秋まき小麦収穫の直後に緑肥用ヒマワリを栽培、さらにヒマワリの後作にデントコーンを栽培する輪作体系をとっている。秋まき小麦を収穫した後の畑地が翌年の作付まで空いてしまうことから地力維持のためヒマワリを作付けしたが、ヒマワリは景観作物でもあり、観光客が車を停めてシャッターを切るなど地域の観光資源にもなっていた。

また、ヒマワリの後作に栽培するデントコーンの生育が良くなるなどの効果もあり、更にヒマワリの飼料化も進めており、土地の有効活用により、景観保全と生産性向上および自給飼料確保が図られている。

### 4) 高収量に裏づけされた、牧草・飼料用とうもろこし生産技術

リゲルファームは、前述した輪作体系、適切な肥培管理、計画的な草地更新(5~6年毎)などにより、高い収量を実現している。

- ・2009年の牧草生収量は、遠軽町平均が3,737kg/10a に対し、リゲルファームは4,110kg/10a
- ・2009年の飼料用とうもろこし収量は、遠軽町平均が5,130kg/10a に対し、リゲルファームは6,359kg/10a

※網走農業改良普及センター遠軽支所提供資料より

### 5) 配合飼料を抑えつつ、高乳量を実現する生乳生産

前述した自給飼料の高収量もあり、配合飼料の給与量は、経産牛1頭1日当たり8kgと、低く抑えられている。しかしながら、経産牛1頭当たり年間9,000kg以上の乳量を実現していることは、自給飼料の品質についても大変良好であることが窺える。

ただし、乳飼比が40%超と高くなっている。これは、牛の健康を考え、ビタミン・ミネラル等のサプリメントに費用をかけているためである。配合飼料のみで乳飼比を算出すると、34%程度になる。

配合飼料価格が高止まりし、乳価の動向も先が見えない昨今、配合飼料を抑えて高い乳量を得る技術は、安定した酪農経営を推進する上で、模範となる経営である。

#### 6) 堆肥の自家利用および近隣畑作農家の副産物との交換で、環境に負荷をかけない畜産

堆肥は、自家圃場の小麦、デントコーン畑、更新草地等に投入するほか、約半量は近隣の畑作農家と敷料に仕向ける麦稈や青シソ搾り粕と交換することで、堆肥の有効活用と環境に負荷をかけない畜産に取り組んでいる。

乳牛の大規模飼養にもかかわらず、畑地も確保して堆肥の還元用地を確保。畑作圃場の近くに堆肥舎を建設して堆肥の投入作業等がやり易く利用しやすいようにした。また堆肥を利用する畑作農家の意見を聞き、畑作農家が利用しやすいようスラリーではなく堆肥処理を選択した。

一般的に大規模酪農経営では、ふん尿処理に苦慮する事例が多いが、リゲルファームでは、ふん尿を重要な資源と捉え積極的に活用し、環境保全、経営安定に寄与している。

#### 7) 携帯電話とパソコンによる牛の分娩を監視するシステムを導入した作業軽減

分娩事故防止などのためには監視が重要であるが、リゲルファームくらいの多頭数飼養となるとほとんど毎日分娩があり、そのための待機・拘束時間が多くなるため、作業負担軽減が課題となる。そこで、リゲルファームでは平成19年から分娩を監視・管理を行うシステムを導入した。

あらかじめウェブ上で設定しておいた分娩予定日が近づくとセンサーを産道に装着し、分娩予定や破水等を送信するシステムである。またリゲルファームではパソコンや携帯電話で遠隔操作ができる「監視カメラ」を畜舎に設置し、より適切な監視を行うことができるようになっている。

この取り組みにより分娩監視の労力の軽減、分娩事故の減少などが図られ、今後の飼養頭数の増大などにも対処できるようになっている。

#### 8) 酪農主体でありながら和牛と畑作を加味した複合経営の実践

大規模酪農でありながら酪農専業でなく和牛繁殖と畑作との複合経営に取り組んでいる。和牛は地域で和牛を導入し始めたころから鹿野氏が導入しており、鹿野氏は町和牛振興会会長として地域で和牛の生産振興に努めている。和牛は繁殖牛を飼養して人工授精と乳牛の未経産牛を借り腹とした受精卵移植による子牛生産を行っており、乳牛資源の有効利用を図っている。また地域では「生田原高原和牛」のブランドで肥育も行っており、和牛生産と鹿野氏の町和牛振興会会長の立場で地域の和牛生産振興に寄与している。

畑作は、経営所得の補完、堆肥の還元用地の確保、敷料としての麦稈の確保、麦・ヒマワリ・デントコーンの輪作体系による地力維持と収量増加などにつなげている。

複合経営の実践により互いの補完、有効利用が図られ、安定した経営となっている。

## 9) 後継者の不足や狭小な飼料面積などの地域の酪農経営が抱える課題に対しての示唆を与える経営の展開

リゲルファームの所在する遠軽町生田原地区は、山合いに広がる農業地帯であるが、周辺の地帯と比較して経営規模は狭小である。また道内の他地域と同様に後継者不足に悩んでいる。

そのようななかで、リゲルファームは、後継者対策・営農の継続のため2戸共同の法人化という道を取り、狭小な飼料面積のなかで法人化による農地の集約と、ガレガの作付け、緑肥ヒマワリの飼料への利用などにより、自給飼料の確保・飼料自給率の向上に取り組んでいる。

これらの取り組み・発想は、地域の今後の酪農経営のあり方、課題克服に対しての貴重な示唆を生産者および関係者に与えてくれている。

## 5 地域農業や地域社会との協調、貢献

### 1) 地域の木材資源のカラマツ材を活用した畜舎等の建築

地域の貴重な資源である木材・間伐材を利用した畜舎施設の建設を積極的に取り組んでいることは、地域の振興、森林の維持・環境保全につながっている。また森林組合等と連携して、木材・間伐材を活用した牛舎施設の積極的な普及啓蒙・利用をすすめている。

### 2) 青シソの絞り粕を敷料に混合して利用

地域の特産品である青シソの搾り粕（青シソドレッシングなどに利用）を堆肥と交換して、敷料に水分調整材として利用している。牛舎内に青シソの爽やかな香りが充満し、人間にも牛にも優しい畜舎環境整備に一役かっている（牛への効果のほどは確認していない）。

### 3) 指導農業士、和牛振興会長等で地域の畜産振興のため活動

鹿野憲嗣氏は平成16年に北海道農業士を取得。地域の指導的役割を果たしている。また鹿野一憲氏は町和牛振興会の会長として地域の和牛生産振興の先頭にたっている。

### 4) 地域の雇用の確保

リゲルファームでは従業員、パートに町内の人間を雇用して地域の雇用の確保に一役かっている。

### 5) 研修生の受入、見学者の受入

リゲルファームでは、(社)北海道農業担い手育成センターや遠軽町と連携し、新規就農等を目指している方の研修受入農場として研修生を受け入れている。

また、カラマツ牛舎やヒマワリの飼料利用などの取り組みに関する多くの見学者を毎年受け入れている。

## 6) 地域の観光に寄与。環境景観作物としてのヒマワリの作付

緑肥、飼料として利用するため、秋まき小麦の後作にヒマワリを作付けしている。北海道の大地に黄色いヒマワリの花が畑一面に広がって咲いている風景は、通りがかった観光客がシャッターを押したくなる風景である。飼料用に利用するため作付けしたヒマワリではあるが、地域のちょっとした観光スポットとなっている。

## 6 今後の目指す方向性と課題

- 1) 自己所有地において育成牛の放牧利用による育成コストの低減と自給飼料利用性の高い後継牛の育成に努める。
- 2) 当牧場は、設立以来、多くの補助金を得て規模拡大を果たしてきた。こうした恩恵に報いるためにも、生乳生産を通じて消費者に安全・安心な牛乳を提供したい。
- 3) 生産コスト低減に向けて、これまでガレガ混播サイレージ、ヒマワリサイレージ等、自給飼料確保の創意工夫を行ってきたが、今後は自給飼料生産の要である「土づくり」にもより一層の改良を加えていきたい。
- 4) 平成 20 年から開始したヒマワリの飼料化だが、最初はスタックサイロでサイレージにした結果、嗜好性には問題ないが、ヌルヌルしてタイヤショベルでの作業に支障があった。そのため、21 年はルーサンヘイを購入しヒマワリに混ぜてラップサイレージにした。この飼料の給与は 22 年からになるが、今後も必要に応じて改良を加えたい。
- 5) ヒマワリを飼料として与えた牛から搾られる牛乳は、リノール酸含量が高いことが分かっているため、安全・安心な食材として、地元の給食への供給、同町の酪農家でアイスクリームなどの加工・販売を行うノルディックファームへの供給について考えている。また、養蜂業者ともヒマワリを通じて連携できないか考えている。

【写真】



カラマツ間伐材を活用した天井の高いフリーストール牛舎



2階建てのパーラー舎、地下ピットで乳量の確認が可能



飼料調製庫



カラマツ間伐材の哺育舎と哺乳ロボット



フリーストール牛舎に隣接した堆肥舎とカラマツ間伐材を利用した堆肥舎



良質な粗飼料を給与、高い TDN 自給率を実現



マメ科牧草の新品種(ガレガ)を作付



ヒマワリの飼料化に取り組む